

## 骨相学とエリザ・ファーマム —アメリカ版『犯罪原論』をめぐる一考察—

公立千歳科学技術大学 共通教育科 小川正浩

1

円形の台座に二人の人物が立っている彫像がある。ひとりには銀杏髻を結った、侍風の男性で、左脇に太刀を差し、右手には扇子が握られている。服装は和装風だが、そのオリエンタル調の意匠や男の顔貌からどう見ても日本人には見えない。もうひとりの人物は左の男性とは対照的に洋装姿で、ハンカチーフを握った右手を左頬に近づけて、誰かに話しかけているような表情で正面を見据えている。その男の左手の指先は和装姿の男の頭上に置かれていて、そのためか銀杏髻の男の視線は彼の方に向けられている。総体的にコミカルな印象を与えている彫像だが、ここで私たちの眼をひときわ引くのは、洋装姿の男の頭部である。一見すると釣鐘状の帽子のようなものを被っているが、そこに格子状に区切られた四角い形状が無数に広がっている。これは一体何を意味するのだろうか。

ジョン・ロジャーズ (John Rogers, 1829-1904) の《仮装舞踏会での骨相学》(Phrenology at the Fancy Ball, 1886) はユーモラスな彫像だが、タイトルから推測するに「精神の科学」(the science of the mind)である骨相学を揶揄しているようにも見える。実際ロジャーズがそういう意図でこの彫像を制作したかどうかは判然としないが、2年後には販売時の価格よりも半額に落ちていることからすでにこの時期には骨相学は利益につながる題材ではなかったと言える<sup>(1)</sup>。ロジャーズはこの17年前の1869年に骨相学の診断を受けているので、その経験がノスタルジックに思い出されたことが制作の動機かもしれない<sup>(2)</sup>。

ロジャーズが生きたこの時代は骨相学以外にもメスメリズム、スピリチュアリズム、水治療法、同毒療法などの疑似科学が大衆のみならず知識人たちまでも引きつけて一大ブームを巻き起こしたことはよく知られているところである<sup>(3)</sup>。しかし、そうした一連の疑似科学の中でも骨相学ほどかなりの人気を博したものはなかった。事実、上は政治家、社会改革運動家、文学者、芸術家から、下は大衆、犯罪者、精神病患者に至るまで骨相学のお世話にならなかった人などほとんどいなかった<sup>(4)</sup>。それくらい19世紀のアメリカ社会をこの科学は席卷していったのである。

そこで本稿では骨相学がアメリカ社会に及ぼした影響の一端を、英国で出版されて高い評価を得た、マーマデューク・サンプソン (Marmaduke B. Sampson, 1809-1876) によるアメリカ版『犯罪原論：脳の構造との関連を考察する犯罪法学についての論考』(*Rationale of Crime: Being a Treatise on Criminal Jurisprudence Considered in Ration to Cerebral Organization*, 1846) を取り上げて見ていくことにする。

『犯罪原論』は刑罰学 (penology)、すなわち犯罪者の行動原理と彼らの更生に骨相学の教義が寄与しうることを説いたものだが、アメリカ版にはオリジナル版にはない詳細な註釈

と 2 種類の挿図が編者によって加えられている。前者は、 Sampson のテキストを読む上で編者がさらなる説明を要すると考える箇所に註記がなされている。一方、後者の 2 種類の図像の方は、単純な描線による頭部の輪郭図とダゲレオタイプの肖像写真から起こされた版画図からなっており、それらに編者による解説が付されている。これらの視覚的図像とそこに付随する骨相学的言説との組み合わせが、骨相学独特の観察と診断を通して犯罪者のような社会的逸脱者の分類と類型化に無意識の裡に加担していく巧妙なレトリックとして機能しているように、私には思われる。そしてこのイメージと文字の修辭的機能がまさにアメリカ版『犯罪原論』の要諦であると思われるのである。したがって、ここでは『犯罪原論』のテキスト分析を試みるのではなく、追加された挿図とその解説文に焦点を当てて両者の関係を考察していこうと思う。その前にまず骨相学の歴史とアメリカにおけるその受容について簡単にまとめておきたい。

## 2

骨相学は二人のオーストリア人、創始者フランツ・ヨセフ・ガル(Franz Josef Gall, 1757-1828)とその弟子ヨハン・ガスパール・シュプルツハイム(Johann Gaspar Spurzheim, 1776-1832)、そしてスコットランド人ジョージ・コム(George Combe, 1788-1858)によって普及をみた<sup>(5)</sup>。

ガルは中学校時代、記憶力に秀でた友人たちの眼がみな一様に大きくて、飛び出ていることに注目し、漠然とではあるが人間の知的能力と外面的特徴には何らかの関係があるのではないかという考えを抱くようになった。大学に進んで解剖学の勉強を始め、若き日の観察を体系化していくうちに、頭蓋の構造のある部分と特定の性格・能力の間に対応関係があるという確信を得たガルは、ラファーター(Johann Caspar Lavater, 1741-1801)の観相学<sup>(6)</sup>とスコットランド派の連合心理学を組み合わせ、独特の脳局在理論(the theory of cerebral localization)を唱えた<sup>(7)</sup>。それによると脳は精神が宿る器官であり、精神は各々が独立した 27 個(後にシュプルツハイムが 35 個に増やした)の能力から成っていて、これらは各々が脳の特定の領域に地勢的に局在し、各々に対応する一器官によって支配される。そして人間の精神的機能はそれを司る脳の個々の器官の大きさに比例し、器官の発達は頭蓋骨に隆起となって顕在化する。したがって、頭蓋骨を計測することによって個人の精神を科学的に測定することができることになる。

こうしたガルの説は、人間の精神活動を唯物論的還元へと貶めることになるため、当然当時のキリスト教イデオロギーと折り合うはずもなかった。事実彼は母国ウィーンを離れることを余儀なくされた。しかし彼は弟子のシュプルツハイムを伴ってヨーロッパ諸国で研究をつづけた。パリに落ち着いた二人は、『神経組織、特に脳に関する解剖学及び生理学』(*Anatomie et Physiologie du Système Nerveux en Général et du Cerveau en Particulier*, 1810-1819)という 4 巻本の共著を出版する計画を立てるが、最初の 2 冊(1810, 1812)が刊行された時点で二人の間に不和が生じ、シュプルツハイムは単身イギリスに旅立った。1815 年にシュプルツハイムの講演を聴いてその信棒者となり、イギリスにおいて骨相学の普及に大きく貢

献したのは、後に大ベストセラー『人間の構造』(*The Constitution of Man*, 1828)を著すことになるジョージ・コームであった。そしてガルはと言えば、残りの2冊(1818,1819)を完成させた後、1828年にこの世を去った。

ところで「フレノロジー」(Phrenology)という名称はガルの造語ではなく、シュプルツハイムのそれであった<sup>(8)</sup>。"Phrenology"は、ギリシア語の"phrein"(=mind)と"logos"(=discourse)にその起源を有し、精神の特殊な現象の学を意味し、また精神と身体、とりわけ大脳との関係の学をも意味した<sup>(9)</sup>。つまり、シュプルツハイムはガルの機能的な大脳生理学を体系的な精神の哲学に変容させたのである。彼は師の教えに見られる宿命論的側面を捨象し、いわば性善説的とも言える立場を取った。たとえば、ガルが脳のある器官を邪悪な傾向を司る器官と同定し、それに「盗み」(larceny)と名前を付ければ、シュプルツハイムはどの器官も適切に発達して機能すれば生得的に邪悪なものはないと説いた。逆に言えば、邪悪な傾向は機能間のアンバランスが原因ということになる。つまり、人が強欲になり盗みに走るのは、それらを司る器官が過剰に刺激されて正常に機能していないことによるのであるから、意識的にそれを抑圧するすればよいことになる。このようにシュプルツハイムの説は、極めて楽観的で性善説的傾向を帯び、これがまたアメリカで骨相学が受け入れられた大きな要因でもあったのである。

アメリカにおいて骨相学に対する関心が出始めたのは1820年代に入ってからであった。1822年、フィラデルフィアで医者たちによって「フィラデルフィア骨相学協会」(the Philadelphia Phrenological Society)が創設され、コームの『人間の構造』のアメリカ版が出版された。その2年後、骨相学の主題を扱った最初のアメリカ本としてチャールズ・コールドウェル(Charles Caldwell, 1772-1853)の『骨相学の諸要素』(*Elements of Phrenology*, 1824)が刊行された。しかし骨相学熱が国内で本格化するのには、1832年にシュプルツハイムがアメリカ全国講演ツアーを行った後である。彼の影響は甚大なもので、全米各地で医者たちを中心とする骨相学協会が次々と設立され始めた。シュプルツハイム自身は講演ツアーの途中で立ち寄ったボストンで病に倒れ、急死することになるが、彼の死によってボストン骨相学協会が設立されることになった<sup>(10)</sup>。

しかし、アメリカ大衆一般への骨相学普及に関して最大の力があつたのは、オーソンとロレンゾのファウラー兄弟(Orson Fowler, 1809-1887 & Lorenzo Fowler, 1811-1896)であった。彼らは義弟のサミュエル・ウェルズ(Samuel Wells, 1820-1875)と共同会社を設立して、ニューヨーク市にその本拠を置いた。ちょうどこの会社の設立時期は、1830年代末に再燃した骨相学ブームのすぐ後であった。この時の大流行の立役者はジョージ・コームであった。彼もまたシュプルツハイムのように全米講演ツアー(1838-1840)に出かけたが、彼の骨相学はその生理学的・哲学的次元から社会的・道徳的次元へと転じ始め、個人と社会を改革するための手段として骨相学を利用しようとした。

ファウラー兄弟とウェルズは機関誌「アメリカ骨相学ジャーナル」(*American Phrenological Journal*, 1838-1911)を創刊すると同時に廉価の大衆向け小冊子を大量に出版した。たとえば、『人々のための骨相学手引書』(*The People's Handbook of Phrenology*, 1865)という小冊子は、

専門家ではない素人にも理解できるような平易な言葉と多くの挿図を用いて骨相学を説明した。また、医者や診断道具として、さらには一般大衆の実用道具として骨相学胸像を生産した<sup>(11)</sup>。その一方で、彼らはまた低価格の値段で大衆の「瘤」を触診・視診してその記号的意味を読み解き、各人の能力の度合いや相応しい職業、ひいては結婚相手までも占ってあげるといった実演も行い、骨相学のビジネス化に成功した<sup>(12)</sup>。

こうした機関誌や小冊子、頭蓋診断を通して大衆の生活や思考に骨相学的言説が染み込んでいくにつれて、ファウラー兄弟らの唱える骨相学も先達たちのそれとは微妙に異なったものになった。つまり、これまでの自己認識や自己改善の道具（「汝自身を知れ」“**Know thyself**”という謎めいた言葉が脳局在地図に付された）としての役割だけでなく、人の性格を読み解く手段としての働きがそれに加わったのである。そのことを確かめるために、たとえば、ファウラー兄弟が著した『一人で学べる骨相学：新版』(*New Illustrated Self-Instructor in Phrenology and Physiology*, 1868)を繙けば、そこに「人間性」(**Human Nature**)という新しい能力器官が付け加えられていることに気がつく。この比較的新しい器官は、ガルもシュプルツハイムも自分たちがそれぞれ27個、35個に分割した能力器官の中には認めておらず、脳局在地図にも器官として局在されていない。「人間性」とは、この書物によると、次のような能力を司る器官である。

性格を認識・識別する能力。動機を知覚する能力。直感的な観察能力。これらの能力は、友人や他人のことを知りたがる人間の欲求に順応する。正常に機能しない時は、疑念をもたらす<sup>(13)</sup>。

こうした定義の後に、「人間性」の大きさの度合いに応じた説明が続く。たとえば、この器官が大きい人は次の説明を読めばいい。

人の性格をその外貌、話し方、素振り、歩き方、その他の類似した徴候から直感的に読む。加えて、個体(**Individuality**)と比較(**Comparison**)が大きい場合、人の小事すべてに気がつき、正しい評価を下すことができる・・・、さらに、秘密性(**Secretivness**)が完全で、仁愛・慈善(**Benevolence**)が大きいと、人の掌握の仕方に長け・・・、また陽気・諧謔(**Mirthfulness**)と理想・想像力(**Ideality**)が大きい場合、人の欠点をすべて見抜くことができる・・・<sup>(14)</sup>。

もう1冊、この種の実用的指南書として有名なサミュエルズの『いかにして性格を読むか』(*How to Read Character*, 1869)から、「人間性」が極めて大きい場合の人についての記述を引用してみる。

あなたは生まれながらの観相学者である。性格を直感的に認識・識別することができ、あなたが出会った人たちの性質や道徳性を一目で正しく評価できる。特に異性の場合

は、である。性格を読み解く際に自らの第一印象に信をおく。さらに、比較が大きい場合、優れた実用的骨相学者・観相学者になるだろう。その器官は、普通は北アメリカ大陸に住むインディアンのそれが大きい、警察官や探偵もそうあるべきだろう<sup>(15)</sup>。

こうして見てみると実用的骨相学は観相学との合体と言ってもよいように思えるが、実際一般大衆にとっては、他人の性格を読むという実用に役立てばよいのであって、両者の異同など殊更に気にすることでもなかったであろう。ただここで興味深いのは、この能力を有する人物として警察官や探偵を挙げていることである。これは世紀末に出てくる精神医学と犯罪人類学がこの観相学的・骨相学的言説との交差点上に浮上してくることを考えれば、極めて注目すべき記述だと言えないだろうか。

さて、この新しい器官の発見によって実用的骨相学が自己認識の道具のみならず他人の性格までも読み取れる、いわば窃視症的道具へと移行した。自分が他人の性格をその人の身体から読み取れると想定することは、当然自分自身の性格も自分の身体から他人に読み取られることになる。常に誰かに見られている＝読まれているという意識がいつの間にか自己抑制を促し、自己改善へと走らせる。こうして骨相学的監視の眼差しが社会の中に網の目のように張りめぐらされていくのである<sup>(16)</sup>。

### 3

1841年、『犯罪原論』のオリジナル版がロンドンで出版されると、出版界からは好評を持って迎えられた<sup>(17)</sup>。1843年に初版が完売するとすぐさま第2版が印刷された<sup>(18)</sup>。この第2版をアメリカ人の若き弁護士ジョン・ビギロウ(John Bigelow, 1817-1911)が入手することになる。彼は進歩的で改革精神に富む人物で、その第2版を落掌した時はニューヨーク州にあるシン・シン州立刑務所(Sing Sing State Prison)の監視官に任命されていた。ビギロウは Sampson の書物を一読し、骨相学と犯罪法学との連関についての彼の主張に共鳴し、刑務所改革に自分と同じ志を抱く、エリザ・ファーナム(Eliza Farnham, 1815-1864)という女性にそれを手渡した<sup>(19)</sup>。

ファーナムが1844年にシン・シン女子刑務所の看守長に任命されたとき、彼女は女性囚人を更生させる新たな手段を刑務所内に導入しようと思案していた<sup>(20)</sup>。当時は犯罪者、特に女性犯罪者は更生の見込みがないという考えが支配的で、刑務所内で規律統制をはかるには体罰がかかせなかった。こうした考え方にファーナムは強く反対した。彼女は骨相学に依拠しながら、犯罪は脳のある部位に局在する能力器官が過剰に発達したことに、あるいは十分に発達していないことに起因すると考えた。したがって、その過剰な能力器官を抑制するように刺激し、あるいは未発達なそれを十分な発達へと促すような骨相学的治療を行えば更生できると説いた<sup>(21)</sup>。もし受刑者が刑務所内でひどい扱いを受ければ彼女たちはさらなる反抗で応じるだろう。逆に親切に対応してやれば彼女たちは何事にも意欲的に行動するだろう。ファーナムはそう信じて、精神的・身体的懲罰の代わりに教育的プログ

ラムを導入した。まず、沈黙の規則を緩和して受刑者同士が午後30分間ほど会話をすることを許可した。そして暗い独居房を照らすランプを付け加えた。さらに受刑者の精神能力を向上させるために音楽と読書を取り入れた。ファーナムは宗教書しかなかった図書室(彼女が看守長として赴任した時には同じタイトルの宗教書が75冊あるだけだった)にディケンズの『オリヴァー・ツイスト』をはじめとした小説類や骨相学関係の書物などを入れた。受刑者たちは自分たちの独居房に本を持っていくことを許され、徐々に、刑務所に収容されている自分たちがまるで学校にでもいるかのような感覚にとらわれていった。だが、ファーナムの改革は刑務所内の牧師や保守的な監督官たちとの間に対立をもたらした。彼らは彼女の更生プログラムは受刑者たちに甘すぎると彼女を攻撃した。また聖書以外の書物を読ませることで受刑者たちを堕落させたと彼女を非難した。ファーナムは彼女らに対して反論を試みたが、状況は改善されず、最終的に1847年に彼女は看守長の職を辞することになった。まさにこうした刑務所改革に取り組んでいた時期に彼女は Sampson の著書に自ら注解と挿図を加え、それに新たなタイトルを付した上でそのアメリカ版を出版したのであった。

上述したように、アメリカ版『犯罪原論』には13人の頭部の輪郭描画とダゲレオタイプから起こされた18人の肖像版画図(内1人だけ正面観と側面観の2枚撮影されているので19枚になる)が添えられ、それらの図像1枚1枚に丁寧な骨相学的解説がつけられている。前者のモデルはシン・シン刑務所の受刑者だが、後者のそれはシン・シン刑務所ではなくブラックウェルズ・アイランド刑務所の受刑者とロング・アイランド農学校の少年収容者であった<sup>(22)</sup>。

ファーナムは『犯罪原論』に自ら序文を寄せていて、その中で頭部輪郭図を描いてくれたエドワード・セレル(Edward Serrell, 1826-1906)とダゲレオタイプを撮影したマシュー・ブレイディ(Mathew Brady, 1822-1896)、そして犯罪事例を選ぶ際に助力を惜しかなかったロレンゾ・ファウラーに謝辞を述べた後で、自分が選んだ犯罪者たちの骨相学的分析を通して彼ら・彼女たちの頭蓋にどういう欠陥が生じ、その結果どういう性向・気質を有しているのかを説いた<sup>(23)</sup>。読者はファーナムが付加した図像と解説によって脳のある器官の発達がどういう状態のときに犯罪行動に駆り立てられるのか、ということを理解することになる。ここで重要なのは、図像自体が何らかの意味を有しているのではなく、特定の意味を持たせているのはファーナムの言語的テキストの方であるということである。こうした図と言葉の相互依存は、ファウラー兄弟や他の骨相学者たちが多くの図像や頭部彫像を使って身体的・外貌的特徴から内面的・性格的特徴との相関を視覚的に大衆に理解させようとしたやり方と類似している。

犯罪者の身体を(疑似)科学的に監視し、生理学的な分析を施す最初の事例としてファーナムとブレイディの共同作業を取り上げ、骨相学と写真の結びつきに言及したのは、アラン・セクーラであった<sup>(24)</sup>。セクーラの関心は、ファーナムとブレイディのダゲレオタイプとのつながりを分類学的秩序の一部として説明することにあるため、頭部輪郭図については言及していないし、図像に付けた解説文も軽視している。アラン・トラクテンバーグ

も、同様に、『犯罪原論』に添えたブレイディの肖像写真について論及している<sup>(25)</sup>。トラクテンバーグの場合は奴隷の肖像写真との対比においてブレイディの犯罪者のそれを取り上げているので、やはり頭部輪郭図を話題にすることはない。もっとも、トラクテンバーグはセクーラと違って、肖像図版に付けられた解説にも注意を向けてはいるが。

ここで私は二人の著名な批評家が議論の俎上に載せなかったもう一つの挿画、すなわち頭部輪郭図に焦点を当てて論じていきたいと思う。結論から言えば、この単純な頭部の線描画がファーナムの解説と結びつくことで、彼女が犯罪者の更生を信じていながらも、自らの骨相学的比較を通して結果的には更生可能な犯罪者とそうでない犯罪者とを分類・類型化してしまっているということである。「骨相学とは」、カーラ・ビッテルが看破したように、「根本的には分類学」であるのだ<sup>(26)</sup>。

頭部の輪郭を描いた画はすべてナンバー表記で配列されている。描画は2種類に分かれていて、ひとつは目と耳が描かれた横向きの頭部図。もうひとつは後ろの頭部の輪郭だけを線で描いた図。これら2種類の頭部描画が全部で13人分載せられている。たとえば、頭部輪郭「No.1」は、おそらく画の下に書かれている解説文がなければ誰が見ても文字通りただの頭部の輪郭を線で描いただけの図にしか見えないだろう。そこに解釈的意味の入り込む余地はないように見える。だが、ファーナムは「No.1は非常に墮落した人物の頭部で・・・性向器官に属する劣性能力が過剰に発達している」と述べる。ファーナムの説明によって読者はこの単純な描画の中に何を読み取るべきかを教えられる。この頭部の輪郭が、24歳の男性犯罪者の「粗暴さと野蛮さ」の視覚的証拠となり、「多血質(快活だが気が変わりやすい)とリンパ質(無気力・不活発)」という気質の持ち主としてこうした犯罪(放火)に至ったという骨相学的診断が下されることになる<sup>(27)</sup>。

次の「No.2」も単純な輪郭線を見ただけでは誰も意味を引き出すことはできないだろう。ファーナムは、この23歳の英国人男性犯罪者(重窃盗罪)は「破壊性」という能力器官が過剰に発達していることを読者に教え、「この輪郭図は優れた情操能力器官の発達がきわめて不完全であることを示している」と述べる<sup>(28)</sup>。読者はファーナムの解説を手掛かりに頭部輪郭線(曲線)は何を意味するのか、あるいはその頭部の形から個人の特徴の何を知ることができるのかを理解することになる。実際、ファーナムのテキストがなければこれらの描画はお互いにほとんど区別がつかないだろう。だが、ファーナムは一見すると識別不可能に見えるこうした人間の頭部輪郭図も骨相学的訓練を積みれば誰でもアマチュアの骨相学者として人間の性格や気質を視覚的に観察できると読者を啓蒙しているようにも見える。

「No.3」は26歳の黒人女性犯罪者の頭部輪郭図である。ここで注目すべきは、後背部の頭部図が2枚描かれているということである。通常の前部背面図とそれのやや前面上方に描かれた両耳上部から上頭部までの輪郭線図である(この犯罪者の骨相学診断にはさらなる頭部輪郭が必要なのだ、と間接的に示しているように思える)。これらの頭部からファーナムは、「物欲性・秘密性・破壊性という能力器官が優位を占めている」と説明し、これらは「彼女が属する人種の社会的特徴」であることを示す。そして「彼女は確実に刑務所で

その生涯を終えるであろう、何故なら彼女は気質的に(constitutionally)犯罪者であるから」、という主張で締めくくる<sup>(29)</sup>。読者はファーナムの結論から黒人犯罪者の更生は難しいと感じるだろう。仮にファーナムの示す「人種の社会的特徴」が、人種間の優劣という考え方に基づくものだとしたらどうだろうか。それが一層明確になるのは「No. 6」の頭部との比較においてである。

「No. 6」は白人女性犯罪者の頭部である。彼女は「若くて、かなりの美貌の持ち主で、ある階級の出である。彼女の頭部には、その線描画が示しているように、特に正義・公正、自尊心、堅固の部位に欠陥が見られる」とファーナムは解説する。脳の特定の部位に欠陥が見られるという記述を読者が読めば、それが彼女を犯罪へと導いたのかもしれないと考えてもおかしくはないだろう。だがファーナムによると、これらの欠陥は一般的にはある程度の社会的地位があつて若くて美しい白人女性には見られないものである。したがって、この白人女性の場合はずっと正常であるはずの能力器官が何らかの原因で正常に機能しなくなったために犯罪に至ったわけであるから、彼女自身にその責任ない、とファーナムは仄めかす。なぜなら、骨相学の観点に立てば、犯罪は脳内の各能力器官間の病理学的不均衡に起因するからである。ファーナムは、「No. 6」は彼女の「人種の社会的特徴」ではない情操器官に欠陥が見られるのだから、それらの器官に働きかけて十分な刺激を与えてやれば、改善が見込まれるだろうと述べる<sup>(30)</sup>。

「No. 3」と「No. 6」を並置してみれば「気質的に犯罪者」（したがって更生不可能）である黒人女性と更生可能な白人女性との区分が、人種に固有の特徴と結びついて階層的な秩序を形成することが判明する。同じような人種的ロジックが、ブレイディの撮影した黒人女性や移民女性、さらには精神障害の少年の写真版画図に付けたファーナムの解説からも明らかである。骨相学という（疑似）科学的な観察・視線を通して更生可能者と不可能者を分類していくこと。ファーナムがアメリカ版『犯罪言論』に加えた図像は（疑似）科学的事実の証拠として読者に訴えかけているようだ。

註

- (1) David H. Wallace, *John Rogers: The People's Sculptor* (Wesleyan University Press, 1967), p. 253.
- (2) Paul & Meta Bleier, *John Roger's Statuary* (Schiffer Publishing Ltd, 2001), p. 196. ロジャーズの骨相学診断の内容については、*Phrenological Journal* XLIX (Sept. 1869), pp. 339-330 に掲載された。この記事は、次の文献に再録されている。Madeleine B. Stern (ed.), *A Phrenological Dictionary of Nineteenth-Century Americans* (Greenwood Press, 1982), pp. 115-116.
- (3) Arthur Wrobel (ed.), *Pseudo-Science and Society in 19th-Century America* (The University Press of Kentucky, 1987).
- (4) 当時の著名人たちの骨相学的診断については、Stern (1982)編集の事典を参照のこと。その辞典には、様々な分野から総勢100名の人物がリストアップされている。



- (5) 骨相学史の概略については、ここでは特にアメリカを中心とした次の文献を参照した。John Davies, *Phrenology, Fad and Science: A 19th-Century American Crusade* (Yale University Press, 1955); Madeleine B. Stern, *Heads & Headlines: The Phrenological Fowlers* (University of Oklahoma Press, 1971); Thomas Hardy Leahey and Grace Evans Leahey, *Psychology's Occult Doubles: Psychology and the Problem of Pseudoscience* (Nelson-Hall, 1983), chap. 3 & 4.; Charles Colbert, *A Measure of Perfection: Phrenology and the Fine Arts in America* (The University of North Carolina Press, 1997), chap. 1. また、日本語の文献に関しては、特に本稿に関して参照したものだけを挙げておく。エカン&ランテリ・ローラ（浜中淑彦・大東祥孝訳）『大脳局在論の成立と展開』（医学書院、1983）；高山宏「正しい顔：脳局在論のイデオロギー」『Imago』1990年11月号（青土社、1990）、102-112頁；上山隆大「身体の科学：計測と器具」大林信治・森田敏照編著『科学思想の系譜学』（ミネルヴァ書房、1994）、149-173頁。さらに骨相学を主題的に扱った初の本格的学術書として、平野亮『骨相学：能力人間学のアルケオロジー』（世織書房、2015）を挙げておく。平野の研究は、骨相学という疑似科学が教育史の研究テーマとして学問的に扱おうということを示した画期的な仕事である。ただし、本書は教育思想史の文脈の中に骨相学を位置づけるという意図のためか、これまで蓄積されてきた科学史や社会文化史の文脈における骨相学研究との連関にあまり言及されていないことが残念である。
- (6) ラファーターによると、観相学とは「人間の外部と内部、眼に見える表面と眼に見えない中身との対応に関する学もしくは知である」。酒井明夫・黒澤美枝「狂気の外観：19世紀ヨーロッパの観相学 (physiognomy) と精神医学」『臨床精神病理』18 (1997)、182頁。基本的に骨相学は頭蓋、観相学は顔という具合にそれぞれの言説体系は微妙に異なっているが、しかしそれにもかかわらず、ラファーターの定義から窺えるように、骨相学も観相学も人間の外形を精神の記号とみる点で明らかに類似性を持っている。アリストテレスまで遡る観相学の歴史については、ユルギス・バルトルシャイテス（種村季弘・巖谷國士訳）『アベラシオン』（国書刊行会、1991）所収の「動物観相学」の章を参照のこと。また、高山宏『メデューサの知』（青土社、1987）所収の「<神の書跡>としての顔：ラファーター『観相学断片』」、ジュディス・ウェクスラー（高山宏訳）『人間喜劇：19世紀パリの感想術とカリカチュア』（ありな書房、1987）も併せて参照のこと。
- (7) 大脳局在論の歴史については、エドウィン・クラーク&ケネス・デュハースト（松下正明訳）『図説脳の歴史：絵でみる大脳局在論の歴史』（木村書店、1984）を参照のこと。特に第10章は骨相学と関係について言及している。
- (8) *phrenology* という名称の成立については異説がある。シュプルツハイムがイギリスに講演旅行に出かけた際、イギリス医者トーマス・フォルスターがその名称を提案し、シュプルツハイムがそれを受け入れて成立したというのが、それである。『平凡社世界大百科事典10』の骨相学の項、389頁；加藤恒男「F・J・ガルの全体像と骨相学：ヘーゲルの批判との関連の視点から」『中京女子大学紀要』25 (1991)、204頁。
- (9) Johann Casper Spurzheim, *Phrenology, or the Doctrine of the Mental Phenomena*, vol. 1 (Marsh,

- Capen and Lyon, 1834), p. 12.
- (10) Anthony A. Walsh, “The American Tour of Dr. Spurzheim,” *Journal of the History of Medicine* 27 (1972), pp. 187-205; Anthony A. Walsh, “Phrenology and the Boston Medical Community in the 1830s,” *Bulletin of the History Medicine* 50 (1976), pp. 261-273.
- (11) Lynn Gamwell & Nancy Tomes, *Madness in America: Cultural and Medical Reception of Mental Illness before 1914* (Cornell University Press, 1995), p. 83.
- (12) すでに 1840 年代の新聞の求人欄には、しばしば応募者は骨相学の診断分析を受けることが条件とされていた。このことから骨相学が商業的に十分成立しようとしていることを裏づけている (Davis, p. 38)。
- (13) O. S. and L. N. Fowler, *New Illustrated Self-Instructor in Phrenology and Physiology* (Samuel R. Wells Publisher, 1868), p.164.
- (14) *ibid.*
- (15) Samuel R. Wells, *How to read Character: A New Illustrated Handbook of Phrenology and Physiognomy for Students and Examiners: with A Descriptive Chart* (Samuel R. Wells Publisher, 1869), p. 190.
- (16) この骨相学的視線の働きは、フーコーが権力装置としての監獄、特に「パノプティコン」という監獄システムを取り上げて、囚人たちが身体の規律・訓練を通して監視の視線を内面化させて自己規制をしていくそれと似ていると思われる。ミシェル・フーコー (田村俣訳) 『監獄の誕生：監視と処罰』 (新潮社、1977 ; 1996)。
- (17) オリジナル版の初版タイトルは、『心の構造との関連を考察する犯罪法学』 (*Criminal Jurisprudence Considered in Relation to Mental Organization*) である。また、刊行時には9つの定期刊行物からの賛辞が寄せられている。 *Rationale of Crime* (1846; 1973), p. xxiv.
- (18) 2 版のタイトルは『脳の構造との関連を考察する犯罪法学』 (*Criminal Jurisprudence Considered in Relation to Cerebral Organization*) に変更されている。
- (19) Madeleine B. Stern, “Mathew B. Brady and the *Rationale of Crime*: A Discovery in Daguerreotypes,” *The Quarterly Journal of the Library of Congress*, Vol. 31, No. 3 (July, 1974), pp. 128-129.
- (20) ファーナムの刑務所改革については、次の文献を参照した。Stern (1974), p. 129; Nicole Hahn Rafter, *Partial Justice: Women in State Prisons, 1800-1935* (Northeastern University Press, 1985), pp. 16-21; Nicole Hahn Rafter (ed.), *Encyclopedia of Women and Crime* (Checkmark Books, 2003), pp. 62-63; Janet Floyd, “Dislocations of the self: Eliza Franham at Sing Sing Prison,” *Journal of American Studies*, Vol. 40, No. 2 (2006), pp. 311-325.
- (21) ファーナムがいつ頃どのように骨相学と出会ったかは、註(19)の文献には記述されていない。ただ、ファーナムはロレンゾ・ファウラーの骨相学的診断を受けていることから、1841年にニューヨークに移り住んで以降、という推測も可能かもしれない。ファウラー兄弟も骨相学的観点から犯罪行動の抑止を主張して刑務所にも訪問していることから、ファーナムが彼らから何らかの影響を受けているとも考えられる。Stern (1971), pp.

39-41.

(22) Stern (1974), pp. 129-130.

(23) Sampson (1846), pp. xxxvii-xxxviii.

(24) Allan Sekulla, "The Body and the Archive," *October*, Vol. 39 (Winter, 1986), pp. 11-14.

(25) Alan Trachtenberg, *Reading American Photographs: Images as History Mathew Brady to Walker Evans* (The Noonday Press, 1989), pp. 57-58.

(26) Carla Bittel, "Woman, Know Thyself: Producing and Using Phrenological Knowledge in 19th-Century America," *Centaurus*, Vol. 55 (2013), p. 109.

(27) Sampson (1846), p. 8.

(28) *Ibid.*, pp. 8-9.

(29) *Ibid.*, pp. 9-10.

(30) *Ibid.*, pp. 16-17.